

萩原朔太郎「秋日帰郷——妹にあたふる言葉——」の考察

——民間伝承と照らして——

大嶋 さやか

はじめに

本稿では、萩原朔太郎が一九一四年から翌年にかけて制作・発表しながらも第一詩集『月に吠える』(一九一七年二月、感情詩社・白日社出版部)に収録しなかった一連の詩の中から、「秋日帰郷——妹にあたふる言葉——」(『詩歌』第四卷第一二号・一九一四年二月)について考察したい。この作品は副題に示されるように、作中に登場する「兄」が「妹」に語りかけるような言葉遣い(文体)で書かれている。また作中に「兄はいんよく極まりなき巷路の無名詩人だ、⁽¹⁾」という詩句があることから、「兄」は「詩人」に設定されていると考えられる。

研究史では、作中で兄妹の性愛が暗示されていることや、詩作品としての前衛性が議論されてきた。大岡信は「妹に対して東京という「都」から、肉親の愛と異性への恋情が混じり合ったような異様

にパッションネートな呼びかけをしていて、眼をみはらせるような衝迫力をもっている」と論じ、その語法は「いちじるしく饒舌な、ある場合には錯乱的な語法」だとして、「妹」へ呼びかける文体・語法の特徴を指摘した。⁽²⁾ また、そうした前衛的な文体や語法を用いた「秋日帰郷」が採られなかったことが、詩集『月に吠える』の特徴だと問題提起した。菅谷規矩雄は、朔太郎が『月に吠える』形成過程において、性に関する「三様のタブーに局限的にゆきあたって」いたとして、その一つに「秋日帰郷」にみられる「近親性愛」を挙げた。⁽³⁾ 北川透は大岡の問題提起及び菅谷のいう性のタブーという観点を継承し、未収録の「秋日帰郷」や「聖餐余録」(『地上巡礼』第二巻第一号・一九一五年一月)について、「性の倫理と詩の規範を共に犯すイメージ」を論じた。⁽⁴⁾ 近年では安智史が、「秋日帰郷」は取り上げていないものの、菅谷と北川の論を踏まえて、詩集から「暴力的エネルギーへの志向性」が排されたことを論じている。⁽⁵⁾

この詩における兄妹の表現は、明治末ごろの朔太郎と、彼の思

想・文学の理解者だった妹・津久井幸子の関係を当てはめて読解されることもあった。大岡信は、朔太郎が幸子に宛てて長文の手紙を書き、自らの思想を打ち明けていたことに注目し、「秋日帰郷」の兄妹愛の表現について、「このような詩句があるからといって、朔太郎が妹に対して近親相姦的な愛情をいだいていたなどと言うことはできまい。(中略) しかしながら、世の常の兄妹の間に生じうる感情の類型としては、ここに表現されているものは、やはり特異な愛執に属するといわねばならないだろう。萩原朔太郎と美貌の妹との間には、容易に他者の介入を許さない強い絆があったと考えるのが自然である」と論じている。⁽⁶⁾ 幸子が「妹」のモデルとは断じられないが、朔太郎がこの作品で、詩人としての自分を「兄」に、詩人の理解者である女性を「妹」に、それぞれ託し、両者の強い絆を表現しようとした、というのは有力な解釈だろう。また朔太郎の詩の女性像といえ、馬場伸子(エレナ)の影響も重要である。⁽⁷⁾ 「秋日帰郷」にもエレナとの関係が投影しているといわれるが、本稿では、作中の男女が兄妹であることに注目し、そこに託されている朔太郎の創作に対する考えを検討したい。

明治末から『月に吠える』前期の朔太郎は神秘主義や世紀末芸術に関心を抱いていた。また朔太郎自身の神秘体験が『月に吠える』形成に関与したと考えられている。これについて、世紀末に関するノルダウの説を読書によって学んだことや、『白樺』で紹介されていたブレイクの影響、アール・ヌーヴォーとの関連性などが論じら

れてきた。⁽⁸⁾ その中で神話や伝承の影響も指摘されている。朔太郎は一九一一年四月二〇日付の幸子宛書簡で「百合の香ひが好きだそうですね、あのアマイ、人を魅する様な強い香ひをかくと私は西洋の神話にある女の美しい妖怪を連想する、艶麗無比、如何なる英雄も心をとかさねばかりの美しい裸体の女が妙なる調の音楽を奏して居る、そしてその近辺を通行する男を誘ひよせ自分の魔領に入れて命をとるといふ美しい妖怪の女神が西洋の神話には沢山ある」と書いている。明治末の朔太郎が「西洋の神話」におけるエロスの表現に関心を抱いていたことがわかる。さらに一九一四年二月一六日付の萩原栄次宛書簡で、「草木の精」と交わるといふ神秘体験(幻覚)をしたという内容のことを書いている。そして、かつて罹患した淋病が再発したのではないかという自覚症状を「草木姦淫の天罰」と捉え、「毎日一時間ずつ神(?)に向つて懺悔」したことも記している。田村圭司は妹宛書簡に注目して、「草木姦淫」について、「この種の幻想の素材は、西洋の伝説等を通じて朔太郎内部に知識として用意されているのである」と指摘している。⁽⁹⁾ 坪井秀人は「この〈草木姦淫〉が「悪徳」「罪業」と自覚されているところに、聖樹崇拜や妖精などの神話・伝承的世界の裏付けを見出せるかもしれない」として、西洋の伝承や神話の影響を推定している。⁽¹⁰⁾

本稿は、研究史で指摘される、『月に吠える』と神秘主義・世紀末芸術との関わりにおける神話や伝承の影響という観点を踏まえながら、これまで取り上げられていない、日本の民間伝承を検討する。

日本文化との関連性をめぐって、菅谷規矩雄や菅野昭正は『月に吠える』における「土俗性」(菅谷)の問題や「民俗的な伝承」(菅野)の影響を重視する見解を提出しているが、日本の民俗文化と具体的に照らしてはいない。磯田光一は「草木姦淫」について白井光太郎『植物妖異考』(一九一四年八月、甲寅叢書第五編)との関連を推定しているが、具体的に論じていない。⁽¹²⁾木股知史は『月に吠える』の「竹」(『詩歌』第五卷第二号・一九一五年二月)について、竹にまつわる伝承との関連を論じているが、「秋日帰郷」は論じていない。⁽¹³⁾先に挙げた坪井論文は古典文学の影響は論じているが、民間伝承については検討していないため、新しく検討する余地があるといえる。⁽¹⁴⁾付言しておく、民間伝承とは民俗学の用語である。和歌森太郎の説明によれば「常民に文字を媒介とすることなしに日常的・集团的・類型的に三世代以上にわたって、くりかえし伝承して来た言葉や行為、また観念を指す」用語であり、民俗とも言い換えうる。⁽¹⁵⁾民俗学では、民間伝承とは人々の日常生活を構成するものであり、また、一国の文化の中で基層文化に該当するものと規定してきた。⁽¹⁶⁾

一、「秋日帰郷」における創作論と前橋周辺の

道祖神信仰

朔太郎は『月に吠える』前半の詩を発表し始めた時期に「SENTIMENTALISM」(『詩歌』第四卷第一〇号・一九一四年一〇月)で

次のように書いている。

我と人との接触、我と物象との接触、我と神との接触、我と我との接触、何物も接触にまざる歓喜はない。この大歓喜が自分の芸術である。／／自分は神と接触せんとして反撥される、自分は物象と接触せんとして反撥される、自分は恋人と接触せんとして反撥される。その反撥の結果は、何時も何時も我と我とが固く接触する。接触の所産は詩である。

「我」が「人」「物象」「神」「我」と「接触」することの「歓喜」が、「自分の芸術」だと述べている。「接触」により「詩」が生まれるとも書いている。「我」が「恋人」と「接触」しようとして「反撥」されるという記述も見られる。「詩」を創造することを、「恋人」と接触しようとすることに喩えていると考えられる。阿毛久芳は、それが「殺人事件」(『地上巡礼』創刊号・一九一四年九月)等に反映していると論じている。⁽¹⁷⁾

「秋日帰郷」では次のように、「兄」が「手」で「妹」の「菊」を摘もうとするイメージが描かれている。

ああ、秋だ、／秋だ、／兄の手をして血縁の墓石にかがやかしむるの秋だ。／妹よ、／兄が純金の墓石の前に、菊を捧げて爾が立つたとき、兄はほんたうにおん身に接吻する。

坪井秀人は、こうした表現について「そこには對他性の際だった自己の姿が浮かび上がる。そしてそこで對他の通路を支えているものこそ〈触る触られる〉関係の基底にある性的因子に他ならない」

と述べて、「菊を摘む」は性的な行いのメタフォア⁽¹⁸⁾だと論じている。そして朔太郎の菊の表現を集約する詩「すえたる菊」(『詩歌』第五卷第一号・一九一五年一月)と「草木姦淫」体験について、「プレ・《浄罪詩篇》時代の詩人の芸術観が、対象との《接触》に基づくものであり、そこから《触る》＝《創作する》という論理が導かれたとすれば、ここにはかかる芸術観や論理の究極の姿を見ることが出来るはずだ」と述べている。⁽¹⁹⁾「秋日帰郷」の「兄」が「妹」の「菊」を摘もうとする表現は、兄妹の性的接触の暗示と考えられ、それは、「詩」の創造を「恋人」との接触到に喩える朔太郎の創作論を反映している、とみなされている。つまり、この詩で暗示される兄妹の性愛は、「詩人」が「詩」を生み出そうとするイメージといえる。また次の箇所にも注目したい。

妹よ、／黎明に起きて兄の生きた墓前に詣でてくれ。み寺に行く路は遠くとも、必ずともに素足にて徒歩まうでかし。なんぢの白いあなうらもつめたい土壌と接触するときに、兄の恋魚はまあたらしい墓石の下によるこびの目をさます。

「兄の生きた墓前」を訪れる「妹」の「素足」が地面に「接触」すると、「兄の恋魚」が「墓石」の下で覚醒する。これについて坪井秀人は「自ら死の世界に入ること(「兄」は「墓石」の下に身を置いている)自己懲罰しながらも、そこにはなお愛人に対する生々しい衝動と自らの性的再生を願う心も投影されている」と読解している。⁽²⁰⁾確かに、「墓」に埋もれている「兄」が、「墓」を訪れた

「妹」との性的な接触を通じて再生する表現だと読解できるだろう。そして、「妹」は母として描かれている。作品の末尾をみたい。

妹よ、祈る。／とりわけてなんぢのをさな兒のうへにも栄光あれかしと。

「秋日帰郷」は、このように「妹」の「をさな兒」を称える文句で締めくくられている。⁽²¹⁾

月村麗子は一九一四年の詩集未収録の作品群のうち、特にキリスト教を題材にとった作品について「詩の創造への道を十字架上の受難になぞらえ、そこに成る詩の誕生を詩人の母体への同化として示すこれらの作品は、キリストの十字架上の死を母への復帰と、その結果としての新生と解するユングの説を想起させる」と述べて、死は「母」への回帰であり、「詩人」の「新生」である、という発想がみられると指摘している。⁽²²⁾長野隆も、『月に吠える』形成過程をめぐって、特にキリスト教の語彙を含む作品について、「幼児」の心象に託された《自己再生》への軌道⁽²³⁾がみられると指摘し、「淫欲」つまり交接のイメージは最初から《母胎回帰》のイメージと二重映しになっているのである。《淫欲》がそのまま《再生願望》となる所以であり、リビドーが《聖》なる意味をはらまねばならぬわけである」と論じている。⁽²³⁾

月村や長野の指摘は、キリスト教の影響がそれほど強く投影されていない「秋日帰郷」にもあてはめられる。「墓」に埋もれた「兄」は、「妹」と性的に接触することにより、「をさな兒」として再生す

るのである。つまり「秋日帰郷」の兄妹の性愛の表現は、「詩人」が「詩」を創造すると同時に「新生」しようとする表現である。

また北川透は「兄」の造形について「リビドーの対象を求めて得られない《楽欲の墓場》をさまようものであるが、しかし、それに感傷し、詩の《涅槃》に転化するものとして、この兄は同時に聖者でもある」として、性的な衝動を抱える「詩人」が聖者とされていると論じている。⁽²⁴⁾確かに作中には「われの真実至聖の詩篇」という詩句もあり、「詩」を聖なるものとする考えが読み取れる。これは「秋日帰郷」に限らないことで、『月に吠える』形成に関わって、「詩」の創造行為の比喩としての性愛を神聖なものとする発想があったことが、北川の著作や長野前掲論文により指摘されている。

先に引用した月村論文は、以上のような朔太郎の創作論がユング哲学と共鳴するとしているが、「秋日帰郷」独自の特徴は、それが兄妹の設定で示されている点であり、この点はユングとの共鳴では説明しきれないだろう。これを日本の伝承という切り口から検討したい。日本神話における兄妹の近親相姦といえ、『日本書紀』『古事記』のイザナギ・イザナミが兄妹だという説が知られているが、福田晃は、民間における道祖神信仰にまつわる説話が兄妹相姦のモチーフを有することを論じている。⁽²⁵⁾本稿は、記紀神話ではなく、朔太郎の身近に存在した道祖神信仰に関わる民間伝承を参照する。

参考文献を要約して述べると、道祖神とは境に祀られている神の総称で、外部の悪霊や疾病を防ぐ神とされる。性に関する信仰の対

象でもあり、縁結びや子供の神ともされる。ドウロクジン、サエノカミなどと呼ばれる場合もある。民間信仰である道祖神信仰は、多様な民間伝承としてあらわれる。まず、神体は自然石ないし石像などが多く、村落の入口や辻などの路傍に置かれる。男女一組の石像の神体は双体道祖神と呼ばれる。また小正月の火祭りを道祖神祭りとする地域もある。さらに、信仰に関する口頭伝承として、厄神伝承が伴う場合もあるが、近親婚の伝承が伴う場合がある。本州では双体道祖神にまつわる兄妹婚説話が伝承されている。⁽²⁶⁾

福田によれば、道祖神の兄妹婚説話の基本的な話型は、配偶者を求めて別々に旅立った兄と妹が、互いを兄妹と知らずに巡り合い結婚した後、兄妹と判明して非業の死を遂げる、その兄妹が道祖神となったのだ、といった構成を有する。⁽²⁷⁾倉石忠彦は、道祖神の兄妹婚説話の伝承は、中部地方と関東北部に多く分布していると述べている。⁽²⁸⁾

この兄妹婚説話が、朔太郎の故郷である群馬県前橋市周辺でも伝承されていたことに注目したい。道祖神に関する調査・研究を確認したところ、現在の前橋市に存在する双体道祖神で、兄妹婚説話が伴うことが確認されているのは、前橋市石倉町、前橋市鳥羽町の二例のようである。⁽²⁹⁾群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編二七 民俗三（年中行事・口頭伝承）』（一九八〇年三月）では、前橋市駒形町と前橋市亀泉町でも道祖神の伝承があると報告されているが、⁽³⁰⁾『県史』には具体的な内容は記載されておらず、原典に当たること



【写真1】 撮影者・筆者、撮影日・2022年12月10日

も不可能だったため、伝承の内容が確認できなかった。よってここでは石倉町と鳥羽町の事例を参照する。

まず石倉町の事例である。前橋市石倉町の神明宮の境内に双体道祖神が置かれている(写真1)。石倉町は、一九五四年に群馬県群馬郡元総社村が前橋市と合併する以前は、元総社村に属していた地区である。⁽³¹⁾前橋市への編入に際して『元総社村誌』(一九五五年六月)が編纂された。佐藤寅雄編『前橋の伝説百話』(一九七四年八月、前橋市観光協会)や「小さな謎を追う 前橋周辺の史跡散歩」というウェブサイトで、石倉町の道祖神にまつわる説話が同書に記載されていることを紹介している。⁽³²⁾同書の「文化篇」の「宗教と信仰」

の「村民の信仰」で、「兄妹の道祖神」と題して、同地区における道祖神信仰について次のような記述がある。

上石倉の旧道と新道の岐点に併立形の道祖神がある。この道祖神は次の物語をもっている。／ずつと昔といつても、江戸中期以降である。美人をもつて聞えた二人の兄妹があつたが、余りの美人ゆえに適齢期になつても互に配偶者がなかつた。ある日別個に配偶者を探すために近郷へ出掛けたところ、ようやく意中の人に逢うことができたが、それが何と兄妹同志とは運命もひ肉である。かくして両人は夫婦になつたものの、村人は彼等を畜生の夫婦といつて相手にせず、ついに村外へ放逐してしまつた。二人は淋しさのあまり無心な子供を相手に生涯を終つたということである。／それ以来子供の神様であるという。男女睦じく寄り添つて歩くものをこの辺では道祖神のようだという。道祖神の別名に「道反大神」というのがある。古典の示すところ、必しも右の兄妹を指した不倫の恋という意味ではない。⁽³³⁾

美しい兄妹が配偶者を探すために別々に旅に出たが、出会つた意中の相手はかつて別れた兄と妹だった。二人は夫婦となったが、村人に冷遇され村から追放された。寂しい生涯を終えたこの兄妹夫婦が、子供の神様である道祖神となったという。この事例は、福田が整理している道祖神の兄妹婚説話の基本的構成を備えているといえる。先にも挙げた『前橋の伝説百話』では、石倉町の住民から、道祖神に関する記憶を聞き書きしている(初出は『広報まえばし』第

五一三号・一九七二年二月一日「伝説とその付近」(第八三回)。それによれば、一九五三、四年に区画整理が行われ、現在の場所(神明宮)に移されたが、移す前は信用金庫の付近にあった。⁽³⁴⁾現在の石倉町にある信用金庫は、しのため信用金庫石倉支店のみであり、移転前は、その付近に道祖神があったと推測されるが、確実とはいえない。

次に鳥羽町の事例である。現在の前橋市鳥羽町は、かつては群馬県群馬郡新高尾村に属していた地区である。一九五五年に新高尾村は高崎市と合併したが、同村のうち鳥羽地区及び中尾地区の一部は前橋市に編入された。⁽³⁵⁾鳥羽町の双体道祖神は、群馬工業高等専門学校の敷地に沿った道路脇に置かれている(写真2)。神体の傍の説明書きによれば、高専ができる前は、現在の場所より百メートル西北にあった。これに伴う説話は次のようなものである。

道祖神は兄妹で、いつでも宿が一緒という。⁽³⁶⁾

男女一組の道祖神について、兄と妹であることが説かれている。

先ほどから参照している福田論文は、日本の説話全般における兄妹婚について論ずる中で、南西諸島の兄妹始祖譚を取り上げている。それは兄妹で結婚した男女を島の始祖として仰ぐというものであり、「兄妹の聖婚伝承」とみなされるとしている。⁽³⁷⁾その伝承には「原始に発想された兄妹婚の聖意識」が堅持されているという。⁽³⁸⁾さらに本土の道祖神の兄妹婚説話を取り上げ、そこに「伝統的な国つ罪の思想」の影響を指摘しつつも、「兄妹婚姻という罪なる行為は、かの



【写真2】 撮影者・筆者、撮影日・2023年4月17日

浄土思想に従って、神仏生前の心の苦難を象徴するものと観じられる」のであり、「その兄妹の横死は、罪のあがないと観じられるものではなく、神仏に転生するための〈生まれ清まり〉の儀礼と念じられて叙述されるものとなっている」とした上で、「始祖神話としての性格を後退させ、それなりの屈折をみせながらも、その伝承に底流してゆくものは兄妹婚を聖婚と観ずる思想であった」と述べている。⁽⁴⁰⁾要するに、道祖神の兄妹婚説話は、神道の倫理観や仏教思想も反映しているが、根底には、兄妹の聖婚という原始的発想が存するということである。

朔太郎の故郷の付近に、兄妹婚を聖なるものと発想する民間伝承

が存在していたといえる。また道祖神は、柳田国男が一九一〇年に刊行した『石神問答』（一九一〇年五月、聚精堂）で取り上げられている。⁽⁴¹⁾民間における道祖神信仰は、「秋日帰郷」が書かれたのと同時代に学問的考察の対象になっていたのである。

道祖神の兄妹婚説話は、民間信仰における神仏が、どういう経緯で生まれたかを、兄妹婚の物語によって説明するものといえる。「秋日帰郷」では、聖なるものである「詩」がどのように生み出されるかを、兄妹の性愛のイメージで描いている。両者はともに、兄妹の特殊な結びつきという要素を用いて、宗教的で神聖なものの生成を表現しているといえる。また、「秋日帰郷」の「兄」が「新生」しようとする表現は、道祖神の説話における兄妹の「生まれ清まり」（福田）という発想と共鳴するところがある。

以上により「秋日帰郷」について、作中に「仏身」「聖母」といった仏教・キリスト教の用語もちりばめられているものの、兄妹の性的接触によって聖なる「詩」が生み出されるという発想は、仏教やキリスト教よりも、朔太郎の身近にも存在した民間伝承における兄妹の聖婚という原始的発想との共通性が強いということができる。

二、男女の二元的構成

「秋日帰郷」には次のような箇所がある。

おん身がにくしんの兄はあまりに憔悴し、疾患し、酒乱のあし

たに菊を摘まむとして敬虔無上の涙せきあへぬ痴漢である。
次のような箇所もある。

妹よ、／疑念敬具。／おんみが菊をさげて歩むの路を清浄にせよ。

「兄」は「憔悴」「疾患」という語で表現されるのに対して、「妹」が歩く道は「清浄」だとされている。月村麗子はこうした詩句に注目し、この作品には「心象の二つの体系の如きものがあつて、詩人、兄に属するものと、その妹に属するものとに分類できる」として、⁽⁴²⁾男性である「兄」が疾患を、女性である「妹」が清浄を象徴すると整理している。一對の男女のイメージが対照的な二つの要素の象徴となっているのは確かである。これについて本稿では、民間伝承を参照して、朔太郎の創作に対する考えとの関連性を論じる。

まず道祖神信仰について、祭りにも目を向けたい。前橋市石倉町の道祖神に関して、『元総社村誌』では前節で引用した箇所が続けて次のような記述がある。

道祖神祭りは正月十四日子供の手によつて行われる。利根河原に毎戸集積した飾物で小屋を作り、一晚ここで起居する。道祖神の子供講は十五才が小屋頭、十四才が平頭、十三才がヘイガミという役付からできていて、小屋頭は講中の長で一切を差配する。／小屋に火をつける前に小屋頭はまず火打石の切火で道祖神を祓める。「ドン／＼焼」は神聖視され、諸魔懲伏の靈力あるものと考えられている。この火にあたると悪疫除けになる

というのもこうした考えから出発している。また餅、鯛等を焼いて食べると無病息災であり、燃えた松の枝を屋根にあげると防火に役立つと伝えている。⁽⁴³⁾

石倉町の利根川の河原で、子供を担い手として、正月一四日から翌日にかけて道祖神を祓う火祭りが行われていたことがわかる。なお都丸十九一は群馬県の道祖神祭りについて、「群馬県では昭和三〇年を境にしましてそれから急速に道祖神焼きがなくなりました。何故かと申しますと当時、警察と学校の協力によりまして徹底的に子ども組を弾圧した。(中略)ほとんど絶滅したに等しいといつていいと思います」と述べている。⁽⁴⁴⁾『元総社村誌』は奥付によれば一九五五年に刊行されているので(中表紙には「昭和二十九年四月一日」とある)、この石倉町の事例は、群馬県で道祖神祭りが廃れていく直前に報告されたものと考えてよいだろう。

朔太郎が生きていた時代に、前橋市の隣村の利根川の河原で、道祖神に関する年中行事が行われていたのである。利根川は前橋市と元総社村の境目でもあった。朔太郎は、「利根川のほとり」(『創作』第三巻第一号・一九一三年八月)、「利根川の岸辺より」(『創作』第四巻第五号・一九一四年五月)、「南の海へ行きます」(『侏儒』第六号・一九一五年二月)、「雲雀の巣」(『詩歌』第六巻第五号・一九一六年五月)等で利根川の岸辺を描いている。前橋市内の利根川で朔太郎が撮影した写真も残されている。⁽⁴⁵⁾朔太郎が、河原で行われる祭りを実際に目にしたとは証明できない。しかし朔太郎の日常生活の

圏内において、道祖神に関する年中行事が営まれていたことは確かだといえる。

ここで他県の事例を参照する。宮田登は新潟県の道祖神信仰について、横山旭三郎『新潟県の道祖神』(一九七七年五月、野島出版)の調査報告を紹介し、特に西頸城郡百川村(現在では糸魚川市百川)における次の事例に注目している。長いので部分的に引用する。

一月十四日午後五時頃より東西に分れ宿に集まり鳥追いをする。それがすむと宿の家では神棚に燈明をあげ、茶の間に机を出し其処に「おでくさん」を飾る。／「おでくさん」とは男女二体で、カツの木(ぬるでの木と思う)を、径5cm、高さ10cm位の丸削りの上部に顔をかき、十字形に両手を開いた形の粗製な人形を言う。／この「おでくさん」に赤い着物を着せて男とし、黄色い着物を着せて女とする。男の持ちものは弓・矢・大砲、女の持ち物は薙刀・たんす・かさをカツの木でつくる。又男は腰に大小刀をさす。これをつくる家は東部では権十郎さん、西部では彦平さんと定めてある。／(中略)／各家々では松飾り等を五日頃とりはずし浜近くの木に結びつけておく。十五日の朝、子供はそれを集め竹を一本中心にして松をそえ、「さいの神焼き」をする。中心の竹の上部に扇子を三本開いて丸形にむすび、その下に「おでくさん」の持物や着物をむすび、書初めもさげる。こうして出来上がると東西とも日の出頃に火をつけ早く燃えた方を負けとする。「さえの神」が山の方へ倒れると

山は豊作、海の方に倒れると豊漁という。／（昭和十六年 豊

田蘭治報告 現在なし⁽⁴⁶⁾

宮田は、この事例で、祭りに使う男女の人形を作る家が東西で固定されている点や、正月一五日に竹などを使って作る「さいの神」を燃やすが、それが山の方角に倒れると豊作で海の方角に倒れると豊漁だと占う、という点に注目して、「この行事には、男と女を基調として、東と西、山と海といった二元構成が、村落空間に成立していることを物語っている」と論じている⁽⁴⁷⁾。男女を基調とする二元構成が、道祖神に関する年中行事に指摘できるというのである。

前橋市石倉町の事例は人形を作るものではないようだが、男女の道祖神を小正月に焼き祓う祭りである点は、宮田が注目している新潟県の事例と同様である。

「秋日帰郷」は月村も指摘する通り、一对の男女としての兄妹のイメージによって疾患と清浄という対照的なものが並置される形で、作品が二元的に構成されている。男女の二元的構成を有する点で、前橋市近辺に存在した民間伝承と通じるといえる。

ところで道祖神信仰における男女の意味とは何であろうか。一組の男女が、境界を守る神とみなされる点について、柳田国男が「橋姫」（『女学世界』一八卷一号・一九一八年一月）で次のように述べたことが参照されている。

すなわち男と女二人並んでいるところは、最も他人を近寄せたくない処であるゆえに、すなわち古い意味における「人ねたき」

境であるゆえに、もしその男女が神霊であったならば、必ず偉い力をもって侵入者を突き飛ばすであろうと信じたからである⁽⁴⁸⁾。

福田晃は、道祖神とは、柳田がこのように指摘しているように、「男女の結合の呪力によって、境に及んでくる邪悪なるモノを退散しようとする民俗に応ずるもの」だと確認している⁽⁴⁹⁾。つまり柳田は、民俗的な思考においては、一組の男女のイメージが、外界のものを撥ね返すような結びつきの力のシンボルとなる、と考察している。そして道祖神信仰には、そうした思考があるというのである。

このように朔太郎の身近に存在した民俗文化において、男女の結びつきに特別な力を認める思考があったこと、そして兄妹の聖婚の発想や男女の二元的構成という観点も併せると、「秋日帰郷」を次のように読解できる。この作品では、男女の二元的構成によって疾患と清浄が並置されている。疾患と清浄とは本来相容れないということが、二元的構成によって示されているともいえる。そして、兄妹の聖婚という神秘的なイメージによって、そういう相容れない二つのものが結びつくことが表現されている。

朔太郎は一九一二年五月一六日付の幸子宛書簡で「生を憧憬する心と、生をいとふ心と此の二つの矛盾^{マドク}が何時まで私の心で戦をつづけて居るのであらう」と書いている。那珂太郎はこれについて「生に対する作者の相反的志向」を指摘し、それが『月に吠える』の「竹」に反映している、と論じた⁽⁵⁰⁾。「秋日帰郷」の男女の対照性による二元的構成も、人間の心における矛盾と相剋の表現として理解で

きる。そして、本来相容れない二つのものを結びつける兄妹の聖婚のイメージが、「詩」を創造しようとする行為の比喩となっている点に、朔太郎が、矛盾する二つの傾向が相争う状態を詩作において克服したい、と考えていたことが読み取れる。⁽⁵¹⁾

ところで『月に吠える』形成過程における性に関する表現について、北原白秋、高村光太郎、室生犀星、山村暮鳥、大手拓次の詩との同時代性や影響関係があったことを、安藤靖彦や坪井秀人が論じている。⁽⁵²⁾ 本稿は、直接的な影響関係は考えられない詩を取り上げる。兄妹の愛情に関する詩という宮澤賢治『春と修羅』（一九二四年四月、関根書店）の一連の詩が思い浮かぶ。「永訣の朝」では、妹である「おまへ」と、兄である「わたくし」という一組の男女が描かれ、両者は死んでいく人間と生者という対照性があり、そして、兄妹の特別な絆が表現されていることにより、その両者が結びつけられているといえる。⁽⁵³⁾ ここにも、対照的な男女のイメージによる二元的構成と、兄妹愛の表現によって、生と死という対照的なものの断絶を超えるという発想が認められる。

賢治が「秋日帰郷」に触発された可能性は低いだろう。直接的な影響関係がないと考えられる二つの詩が、同様の構成や発想を有しているといえる。これは、道祖神に関する民間伝承にみられる男女の二元的構成や兄妹の聖婚の発想が、個性や時代を超えて共有されるものであり、それが両作品の根底に流れているからだ、と考えることも可能である。

三、「詩」を抑圧する表現

「秋日帰郷」には次のような詩句がある。

妹よ、兄の肉身は曾て一度も汝の額に触れたことはない。

次のような詩句もある。

われらいかに相愛してさへあるに、兄の手は、足は、くちびるは、かつて一度もなんぢの肉身に触れたことさへないのである。

「兄」は「妹」に触れたことがない、ということが強調されている。これについて北川透は「現実の地平においては禁圧された、不可能なエロスであることが示されている」として、「妹」との性愛が抑圧されていると論じている。⁽⁵⁴⁾ 坪井秀人は『月に吠える』形成過程をめぐって「過剰な創作意識に対する抑圧」があったと指摘し、そこに「創作することそのものへの原罪の意識」を読み取っている。⁽⁵⁵⁾ 「秋日帰郷」において、「兄」が「詩」の創作行為の比喩としての「妹」との接触を抑圧する表現も、創作に対する抑圧の意識と関わりがあると推定できる。

これについて道祖神の兄妹婚説話を再び参照したい。前節で取り上げた前橋市石倉町（旧・元総社村石倉）の事例には、村人が兄妹を「畜生の夫婦」と呼んで村から追放する、という要素が含まれている。これはどのように捉えうる要素だろうか。

倉石忠彦は、道祖神の兄妹婚説話として、次の事例（伝承地・群

馬県吾妻郡中之条町山田）を取り上げている。

道祖神はきようだい夫婦であるという。／親が、一番いい相手を見付けて来いといって旅に出した。しかし、二人がどこを見ても思うような者がいなかった。／二人で、両方から帰って来て（べつべつの方向から帰って来たこと）、あの人ならきょうよしでいいと思つたら、きょうだいだつた。しかし、仕方なく、きょうだいで夫婦になった。／そのために、罰として、みせしめのために四辻に、二人で立っているのだという。⁽⁵⁶⁾

道祖神は、兄妹で結婚した罰として四辻に立って見せしめを受けているのだという。この事例を、倉石は次のように整理している。

倉石の論考中では事例二三である。

これらの事例はまず、（一）縁結び（事例一八、一九）、（二）下の病い（事例二〇、二一）に効験があるとされる。そして、その碑を祀る意味は（三）供養（事例二二）、（四）見せしめ（事例二三、二四）で、先に挙げた長野県遠山地方の事例も（三）の供養に含まれる。（五）恥ずかしいからシバで隠す（事例二五）というのは（四）と同様で、共に兄妹婚を忌避するものであるが、（四）の方がより強い。⁽⁵⁷⁾

倉石は、この吾妻郡中之条町の事例において、兄妹の碑を道祖神として祀ることについて、「見せしめ」である、という意味づけがされており、それが兄妹婚を強く忌避する要素であることを指摘している。前橋市石倉町の事例における、村を追放されるという要素

は、こうした「見せしめ」の要素と近いものと考えられる。村外に追放された兄妹が、道祖神となつてその場所に祀られている、という意味づけが読み取れ、また、村人が兄妹の夫婦を畜生と呼んだというのは、兄妹婚を忌避するものと捉えられる。

つまり朔太郎の身近にあつた民間伝承には、兄妹婚を忌避する要素が含まれている。換言すると、こうした伝承を保持する村落社会に、兄妹婚に対する忌避意識があつたといえる。⁽⁵⁸⁾

このことは「秋日帰郷」を考える上で示唆を与える。道祖神の伝承では、兄妹の夫婦が見せしめに辻に立っていたり、畜生とみなされて村外に追放されたり、といった要素に、村落社会で兄妹婚が忌避されることが示されている。これを参照すると、「秋日帰郷」の「兄」が「詩」の創作行為の比喩としての「妹」との接触を抑圧する表現に、「詩」が社会で忌避されるという意識を読み取ることができる。つまり「兄」が「妹」との性愛を抑圧する表現は、社会で忌避されるような「詩」を、「詩人」が自ら抑圧する表現だと解釈できる。

「秋日帰郷」の兄妹の性愛の表現をめぐって、菅谷規矩雄は「萩原における現実喪失、社会的な対他関係の不可能さを逆倒したものであることを意味する」と述べている。⁽⁵⁹⁾北川透は、朔太郎の詩法が「法的、制度的、慣習的、共同倫理的なタブーと衝突する位相にあつた」ことを示すものと論じている。⁽⁶⁰⁾つまり、『月に吠える』形成に関わる朔太郎の思想に、社会性の欠如ないし反社会的な傾向があつ

たことを示すもの、と位置づけられている。しかし、「兄」が「妹」との接触を抑圧する表現について、社会で忌避される「詩」を「詩人」が抑圧していると理解することもできるため、この詩における性愛の表現を反社会的と断ずることに留保が必要だと考えられる。これについて詩と社会の関係についての朔太郎の考えを参照する。朔太郎は「愛誦詩篇に就いて」（『詩歌』第五巻第四号・一九一五年四月）で次のように述べている。

なかんづく川路柳虹氏と申すフランス派の大家の如きは『日本の詩壇は存在して居るのか、存在して居ないのか、心細き極みである』といふやうな頗る自暴自棄的の言葉を発せられ候こと気の毒の至りに候、川路氏は存在せずとも日本現今の詩壇は立派に成長致しあり候あひだご安心下され度候。／（中略）／社会が詩を理解せぬ故に継子あつかひにする故に、社会が低級にして我々の詩と交渉なき故に（それは事実である）今日の詩が無用の長物であり、今日の詩壇が存在の価値を疑ふと申すならば我々は唯だ天を仰いで嘆息致すのみに御座候。二十年、三十年の後、社会が我々に追付く時節を待ち居るのみに候。但し我々より降つて風俗と握手を求むること如何にしても自分等には出来がたき芸当に御座候。／彼の西洋まがひの翻案詩に就いては小生等の関はりなきところ、かやうの者は外国語の造詣ふかき諸家に御まかせ致し、我々は一意専心我々自身の実感を我々自身のリズムに盛りあぐるために手を磨くものに御座候。

／（中略）／然れば小生の愛誦詩篇と申すもの、斯様な新らしき現代日本人の日本語の詩篇に御座候。なかんづく私自身の詩篇をもつとも愛誦仕り居り候。

ここで朔太郎は、詩の存在感の薄さを強調する川路柳虹に反論して、日本詩壇は成長しつつあると述べながら、社会と詩の関係に言及している。その内容から、朔太郎が、社会と詩が没交渉であることを認めており、社会における詩の存在価値という課題を意識していることが読み取れる。そして柳虹らの「西洋まがひの翻案詩」に対して、自分が作ろうとしている「愛誦詩篇」は「現代日本人の日本語の詩篇」だ、という自負を表明している。⁶¹ こうした言説からは、朔太郎が、自らの詩を、柳虹などの象徴詩と区別して、社会における詩の存在価値という課題を克服する詩だと考えていることがうかがえる。

こうした考えを踏まえると、「秋日帰郷」における、社会で忌避されるような「詩」を「詩人」が抑圧する表現には、詩の社会性を獲得しようとする朔太郎の自負を読み取ることができる。

おわりに

朔太郎は『月に吠える』冒頭章や「くさつた蛤」章の詩篇で、神秘的幻覚・病的幻想というべき斬新なイメージを創出した。研究史では、その背景をめぐる、朔太郎の神秘体験及び神秘主義や世紀

末芸術に対する関心という点から、西洋の美術・神話・伝承等の影響が検討されてきたといえる。本稿はこうした流れを踏まえつつ、

研究史で検討されていない日本の民間伝承を参照して、「秋日帰郷」にみられる、創作に対する朔太郎の考えを考察した。前橋周辺にも存在した道祖神の兄妹婚伝承が、福田晃のいうように、「人類が原始に発想した神話幻想」⁽⁶²⁾である兄妹始祖譚に通じるものであり、兄妹の聖婚という発想を有することを踏まえれば、そういう普遍的な幻想・発想を「秋日帰郷」にも見出すことは可能だろう。

「秋日帰郷」において、兄妹の性的接触によって聖なる「詩」が生まれるという創作論が読み取れることや、兄妹が対照的な男女として描かれていることについて、道祖神信仰に関わる民間伝承に見出される兄妹の聖婚の発想及び男女の二元的構成との共通性を指摘した。その上で、創作行為の比喩としての兄妹の性愛の表現は、二元的構成において並置された相容れない二つのものを、兄妹の聖婚のイメージによって結びつけるものと論じて、そういう表現からは、人間の心における矛盾する二つのものの相剋を創作において克服したい、と朔太郎が考えていたことが読み取れると論じた。そして「秋日帰郷」の兄妹の性愛の表現は、先行研究では、『月に吠える』形成に関わる朔太郎の思想が社会性を欠いていたことを示すものとして理解されてきたが、これについて再検討した。作中の「兄」が「妹」との接触を抑圧する表現は、道祖神の兄妹婚説話を参照すると、社会で忌避されるような「詩」を「詩人」が自ら抑圧する表現だと解

釈することが可能であり、詩の社会性の獲得という朔太郎の自負を示すものと位置づけなおすことができる。

研究史では、『月に吠える』形成過程における性に関する表現の中で、この作品のそれが兄妹の設定であることの意味について、朔太郎と幸子の関係が背後にあるという以外には十分に検討されていなかった。あるいは朔太郎の表現史において、罪意識に関わる要素として、浄罪詩篇につながるものと位置づけられてきた。⁽⁶³⁾しかし、日本の民間伝承を手掛かりとすることで、朔太郎の家族関係や彼一人の表現史のみに関わるものではなく、直接的な影響関係がないと考えられる宮澤賢治の詩における兄妹の表現と共鳴するものと捉えることも可能になる。

本稿では「秋日帰郷」を、創作についての朔太郎の考えが示されているテキストとして読解した。今回の考察を踏まえて『月に吠える』の詩を読解することを今後の課題としたい。

注

- (1) 坪井秀人「光る手」と「いためる手」——萩原朔太郎、ブレ・《浄罪詩篇》の一面——『名古屋大学国語国文学』第五五号・一九八四年二月。坪井「萩原朔太郎論——〈詩〉をひらく——」一九八九年四月、和泉書院）参照
- (2) 大岡信「朔太郎問題」『無限』一九六二年二月
- (3) 菅谷規矩雄「萩原朔太郎一九二四」一九七九年五月、大和書房、二二一頁
- (4) 北川透「萩原朔太郎〈言語革命〉論」一九九五年三月、筑摩書房、一七

○頁

- (5) 安智史「萩原朔太郎『月に吠える』と戦争——日露戦後／大逆事件／世界戦争と『月に吠える』期の朔太郎——」『日本近代文学』第九八集・二〇一八年五月
- (6) 大岡信「(エッセイ) 一枚の写真 美貌の妹」久保忠夫編『新潮日本文学アルバム一五 萩原朔太郎』一九八四年五月、新潮社、一〇〇頁—一〇一頁
- (7) 坪井秀人「朔太郎の〈菊〉——「すえたる菊」を中心に——」『日本文学』第三四巻第九号・一九八五年九月、坪井注(一)前掲書
- (8) たとえば田村圭司「萩原朔太郎研究—抒情の構図—」一九八三年六月、明治書院。高橋世織「萩原朔太郎『月に吠える』とアール・ヌーヴォー」『比較文学年誌』第二〇号・一九八四年三月。阿毛久芳「『月に吠える』形成の側面——表現の場における自我意識の在所——」『日本文学』第三五巻第一〇号・一九八六年一〇月。阿毛久芳『日本近代文学研究アーカイブ 萩原朔太郎』愛隣詩篇ノートから浄罪詩篇へ、再び」『湘南文学』第五五号・二〇二〇年三月
- (9) 田村圭司注(8)前掲書、九四頁
- (10) 坪井秀人注(7)前掲論文
- (11) 菅谷規矩雄注(3)前掲書、二二八頁。菅野昭正『詩学創造』二〇〇一年五月、平凡社ライブラリー、九七頁
- (12) 磯田光一「萩原朔太郎」一九九三年三月、講談社文芸文庫
- (13) 木股知史「画文共鳴——『みだれ髪』から『月に吠える』へ——」二〇〇八年一月、岩波書店
- (14) 坪井秀人注(7)前掲論文
- (15) 大塚民俗学会編『日本民俗事典』(一九七二年二月、弘文堂)の「民間伝承」の項(執筆者・和歌森太郎)、七〇一頁
- (16) 『日本民俗大辞典・下』(二〇〇〇年四月、吉川弘文館)の「民間伝承」の項(執筆者・平山和彦、小熊誠「民俗学にとって「文化交流」研究とは何か——沖縄と中国の文化交流を事例として——」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇六集・二〇〇三年三月)参照

- (17) 阿毛久芳注(8)「『月に吠える』形成の側面」
- (18) 坪井秀人注(7)論文、注(1)前掲書、九七頁—九八頁
- (19) 坪井秀人注(7)論文、注(1)前掲書、一〇六頁
- (20) 坪井秀人注(7)論文、注(1)前掲書、九七頁
- (21) 大岡信注(6)前掲論文は、「をさな兒」は幸子の長男に由来すると推定。月村麗子「萩原朔太郎の詩(七)——現代詩の起点をもとめて——」『学燈』第七六巻第一一〇号・一九七九年一月
- (22) 長野隆「萩原朔太郎・〈陰画〉の構図」長野編『萩原朔太郎の世界』一九八七年六月、砂子屋書房、一〇九頁—一一一頁
- (23) 北川透注(4)前掲書、一三四頁
- (24) 福田晃「兄妹婚姻譚の行方」『南島説話の研究——日本昔話の原風景——』一九九二年三月、法政大学出版局
- (25) 小島環礼「イザナキ・イザナミの神話」(『宗教研究』第三五巻・第四輯、一九六二年三月)、大島建彦「道祖神の信仰と説話」(秋山虔編『中世文学の研究』一九七二年七月、東京大学出版会)、倉石忠彦「道祖神信仰論」(一九九〇年一〇月、名著出版。特に「序章 道祖神信仰研究の問題点と範囲」、注(16)『日本民俗大辞典・下』の「道祖神」の項(執筆者・倉石忠彦)参照。
- (26) 福田晃注(25)前掲論文、前掲書、一四五頁
- (27) 倉石忠彦「第二章第三節 厄神伝承と兄妹婚伝承」倉石注(26)前掲書
- (28) 管見に及んだのは池田秀夫「双体道祖神考」『群馬県史研究』第九号・一九七九年三月、群馬県史編さん委員会編『群馬県史 資料編二七 民俗三(年中行事・口頭伝承)』一九八〇年三月、倉石忠彦注(26)前掲書
- (29) 群馬県史編さん委員会注(29)前掲書、九一六頁
- (30) 元総社村村誌編纂委員会編『元総社村誌』一九五五年六月「現代篇 村の区域」参照
- (31)

- (32) 佐藤寅雄編『前橋の伝説百話』一九七四年一月、前橋市観光協会。執筆
者不明「小さな謎を追う 前橋周辺の史跡散歩」[https://web.archive.org/
web/20181106091514/http://www.geocities.jp/siesakisano/index.html](https://web.archive.org/web/20181106091514/http://www.geocities.jp/siesakisano/index.html)
最終閲覧日・二〇二三年七月二五日
- (33) 元総社村誌編纂委員会編注(31)前掲書、一四八頁
- (34) 佐藤寅雄注(32)前掲書。記憶を語っている住民は斎藤岩太郎さんとい
う人である。
- (35) 高崎市公式ホームページ (<https://www.city.takasaki.gunma.jp/>) の「第
六三回 戦後の町村合併 その一」執筆者・石原征明) 参照。最終閲覧日・
二〇二三年八月二三日
- (36) 引用は池田秀夫注(29)前掲論文
- (37) 福田晃注(25)前掲論文、前掲書、一二九頁
- (38) 福田晃注(25)前掲論文、前掲書、一六一頁
- (39) 福田晃注(25)前掲論文、前掲書、一四六頁
- (40) 福田晃注(25)前掲論文、前掲書、一六一頁
- (41) 倉石注(26)前掲書参照
- (42) 月村麗子「萩原朔太郎の詩における菊の心象」『上代たの先生米寿記念
英米文学論集』一九七五年一〇月、坪井秀人編『日本文学研究資料新集二
四 萩原朔太郎——感情の詩学——』一九八八年六月、有精堂、一〇〇頁
- (43) 元総社村誌編纂委員会編注(31)前掲書、一四八頁～一四九頁
- (44) 都九十九「群馬県のだ祖神祭」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』
第二集・一九九〇年三月
- (45) 野口武久編『萩原朔太郎撮影写真集完全版』(二〇〇九年一月、みやま
文庫) 参照。安智史「無名化」普遍化される郷土——萩原朔太郎撮影写真
をめぐる——『萩原朔太郎というメディア——ひき裂かれる近代／詩
人——』(二〇〇八年一月、森話社) も、「秋日帰郷」についてではないが、
朔太郎の写真に注目して、前橋周辺の風景が詩に投影していると論じてい
る。

- (46) 横山旭三郎『新潟県のだ祖神』一九七七年五月、野島出版、一六三頁、
一六四頁
- (47) 宮田登『宮田登 日本を語る——女の民俗学』二〇〇六年二月、吉
川弘文館、七五頁
- (48) 引用は『柳田国男全集六』一九八九年二月、ちくま文庫、三六八頁、
三六九頁
- (49) 福田晃注(25)前掲論文、前掲書、一四二頁
- (50) 那珂太郎「本文および作品鑑賞」伊藤整編『近代文学鑑賞講座一五 萩
原朔太郎』一九六〇年十二月、角川書店、三〇頁
- (51) 月村麗子注(42)前掲論文(注(42)前掲書、一〇二頁～一〇三頁)は、「す
えたる菊」では「聖餐余録」とは菊の象徴性が変化していることに注目し
て、そこに、「詩人と対象との心霊的ふれ合いは、対象の変容となって完
成する」という「創作過程論」を指摘し、「凝視者と凝視される対象の完
全な合一」による「対象の変容」は現実では不可能だが、創作の中で実現
される、という朔太郎の考えを読み取っている。本稿は、詩人と女性の接
触の表現について、人間の内部の葛藤に関わる創作論を読み取る点で、詩
人と対象の関係という問題を読み取る月村の論とは異なる。また阿毛久芳
注(8)「月に吠える」形成の「側面」に、「浄罪詩篇には、天と地、聖と
邪の拮抗を懺悔することによって浄化しようとする志向がある」という指
摘がある。「秋日帰郷」から読み取れる、人間の内部の矛盾を創作におい
て克服するという考えは、冒頭章の浄罪詩篇の形成に関わると推定される。
- (52) 安藤靖彦「月に吠える」の地脈——「感傷詩論」などのかかわりで
『説林』第二八号・一九八〇年一月。坪井秀人「性が語る——二〇世紀日
本文学の性と身体——」二〇一二年二月、名古屋大学出版会
- (53) 『校本 宮澤賢治全集 第二卷』(一九七三年七月、筑摩書房) 参照
- (54) 北川透注(4)前掲書、一三八頁
- (55) 坪井秀人注(7)前掲論文、注(1)前掲書、一〇六頁
- (56) 引用は群馬県史編さん委員会注(29)前掲書、八四〇頁

(57) 倉石忠彦「第二章第三節 厄神伝承と兄妹婚伝承」倉石注(26)前掲書、一六七頁

(58) 倉石忠彦「序章 道祖神信仰研究の問題点と範囲」倉石注(26)前掲書(二〇頁)に、道祖神の伝承のうち「近親相姦を語るもの」について、「父娘相姦のものと兄妹相姦のものとがあるが、いずれも社会的には忌避される行為を行なったとされるのである」という指摘がある。福田注(25)前掲論文、前掲書(一三〇頁)は、南西諸島の兄妹始祖の伝承にも「兄妹の婚姻は、本来は忌避すべきことの意識が含まれている」事例があると指摘している。

(59) 菅谷規矩雄注(3)前掲書、二二一頁

(60) 北川透注(4)前掲書、一七〇頁

(61) 久保忠夫「大正初期の詩壇」『萩原朔太郎論・上』(一九八九年六月、塙書房)は、この評論が柳虹「詩壇月評」(『未来』第二年第二号・一九一五年二月)に应答したものと指摘し、朔太郎が『未来』の同人の詩を西洋模倣と批判して自分の詩は「日本の詩」だと主張したことを論じている。

(62) 福田晃注(25)前掲論文、前掲書、一六一頁

(63) たとえば国生雅子「浄罪詩篇」新考——『月に吠える』論転換への一視点——『文学』第五一卷第九号・一九八三年九月

【付記】 朔太郎の引用は初出に、書簡は筑摩書房版『萩原朔太郎全集』全一五

巻+補巻(一九七五年五月—一九八九年二月)に拠り、ルビと圈点を適宜省き旧漢字は改め、「/」で改行を示した。誤字は全集に準拠して適宜訂正した。参考文献の引用において算用数字を漢数字に改めた。